

---

# パパと呼ばれて

紫水晃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パパと呼ばれて

### 【Zコード】

Z2463D

### 【作者名】

紫水晃

### 【あらすじ】

ある日突然、見知らぬ外人幼女に『パパ!』と抱きつかれたらどうするだろうか。どうもこうもない。おそらくは厄介な毎日が始まること。

(前書き)

良ければ、どうぞ。これらと短編を読んで参考にしました。

突然だが、いきなり見知らぬ外人幼女に『パパ！』と抱きつかれたらどう反応するだろうか？

幼女趣味のロッコン親父なら悶絶必至の夢のような極上シチュエーションだが、あいにく俺はそんな趣味など持ち合わせていない。だから俺は健全な反応をする。

「はあ？」

夕暮れ時の学校帰りの出来事であった。帰宅部に絶賛入部中で、活動熱心な俺が部活内容である『さつさと帰宅しよう』を実行しなかつたのには理由がある。現生徒会長であり俺の幼馴染みでもある南条澄香なんじょう すみかにいざ帰ろうとした所で捕まえられ、定時が過ぎるまで生徒会の仕事を手伝わされていたのだ。

散々こき使われ、その疲労でふらふらしながら歩いていると、街角からいきなり少女が飛び出してきて、ぶつかったのである。

それが、俺とその少女との邂逅であった。

「おつと」

俺はそれほど衝撃は感じなかつたが、少女にはかなりの衝撃のようで、尻餅を付いて俺を見上げると、目に涙を溜め始める。ぶつかられたのは俺だけと謝ろうかなと思案しつつ腰を屈めると、少女はバツと起き上がり、いきなり俺の首に小さな腕を回して抱きついてきた。

「パパ！」

そう叫んで。

「ええっ！？」

俺は困惑するばかりだ。いつのまに俺は娘を持つ歳になつたのだろうか。それに、そゝなるようなことの身に覚えがまったくないのだが……。というか、戸籍違うだろキミ。

肩までかかる銀髪、田鼻が端正に整つていて、将来の期待は大だろう。ブルーの瞳には意思の強さを感じさせられ、西洋人形と見間違いそうになるほどの蒼いゴージャスなドレスをその身に纏つている。

見るかぎり生糀の外人さん＆ジゼのセレブの娘さんに見えるこの幼い少女は、なにゆえ俺を『パパ』と呼ぶのだろうか。

そう素朴な疑問を抱きながら抱きついて離そつとしない少女の頭を所在なく撫でていると、後ろから車を急停止させる鋭い音が響いた。

「なんだあ？」

俺はうるさいなあと振り返り……、ギョシとして固まる。

そこには一台の高級そうな車があった。ベンツだろう。黒光りする車体の中から、明らかに普通の人ではないヤクザのような強面のおっさん……、あ、いや、おじさま達が出でます。

その数、六人。

なぜか俺を睨んでくるのだが、……、氣のせいだと信じたい。

「てんめエぶツ殺すぞオオお……！」

いきなり殺人予告をされる俺。ホワッ？「つむそこなあと想つただけでそれですかー！？」

「ビニの組のもんじゅこフンヒー……！」

どこの組だと言われても……。一年B組としか言えないのですが？

「タマア取つたろかアガキイイイー……！」

六人が六人、そんなに叫ぶと頭の血管切れちゃいますよと忠告しきくなるような血管を額に浮かび上がらせ、“懐”に手を潜らせつけ

つ近付いてくる。

…… オイオイ。そこになにがあるってんだよ。

冷や汗で背中がびっしょりと濡れる。そんな俺に、少女が耳元で囁いた。

( 逃げて… )

その言葉を筆頭に、俺は弾かれるよつに体を突き動かす。後ろから『野郎オオオ!!』『待てやオラアアア!!』といつ怒声や銃声に涙を流しそうになりながらも俺は少女を抱えて全力で足を動し、少女が思つたよりも軽いことと、捕まれば殺されると半ば強迫観念にも囚われていたので、いつも以上の速さで逃げ出すことができた。

地の利は長年この街で過ごしている俺に分があり、狭い通路や入り来んだ路地、けもの道などを通り、なんとか逃げ切ることに成功した。

「ゼエ…ハア…ゼエ…ハア…」

その頃にはもう息切れも半端なく、心臓の鼓動も跳び跳ねているようだった。何度も深呼吸して息を整え、辺りを見回す。

「……………？」

必死で逃げていたので見慣れない場所に来てしまったようだ。すぐ側にマンションが見えるが、どこの住宅街だろうか。見覚えがあ

るんだが思い出せない。住所が分かればなんとかなるんだが……とにかく、隠れられるような場所に移動しよう。

本当は家に逃げ込むのが一番だったのだが、運悪く家とは逆方向に向かつて逃げていたので無理になつた。どの方向に逃げていったのか気付かれてはいないと思うが、どこかに隠れてしばらくの間やり過ぎしたほうがいいだろ？

「……って、隠れられそうな場所ってどこだよ」

俺はキヨロキヨロと周りを見渡しながら自分にツツ「ム。」ちとら普通の人間なんだ。安全に隠れられるような場所なんて熟知してないんだよ。

「……パパ？」

頭を抱えて蹲る俺に、ようやく俺から離れてくれた少女が首を傾げて覗き込んできた。

「……う」

それを間近に見て思わずつめこてしまつ。

……口つ吻でもない俺がドキッとしてしまうのだから、世の口リコン達がこの少女を見たらどうなるのだろうか。卒倒はしないはずだ。犯罪に手を染めようとするだろうな、きっと。

それほどの美貌をこの少女は持つているのだ。ホント、将来が楽しみだ……って。

「……な、なあキミ」

俺は今更ながらに声を掛ける。少女は口元に笑みを綻ばせて『なーに?』と先を促す。

「俺、……キミのパパじゃないからね?」

その当然のことをする。

と、次の瞬間、

「ふ、ふえ……」

少女は泣き出すというリーサル・ウェポン（最終兵器）を発動した! 僕に のダメージ!

「……わ、わあー泣くな泣かないでーっ!!」

俺は慌ててあやしに掛る。さつきのヤクザのような人達にバレるとこう心配は不思議と思い付かなかつた。ただ純粹に泣き止んでほしいと願う。

「わ、わかったっ! 俺はキミのパパだお父さんだ! だから、ね? 泣かないでっ」

少女を抱き締めてヤケクソのようにパパだと肯定する。

「……本当?」

少女は鼻をすすりながら俺の顔を見つめると、日本語でそう聞い

てへる。俺は何度も頷いた。

「……えへへ～」

少女は嬉しそうに笑うと、ギュッと抱きつってきた。すると温かい感覚が心に芽生えてへる。自然と優しくなるようなほんわかとした気持ち。

「まあ……今のどこのせ、いいかな」

俺はそう駄目、やれやれと首を振るがしかし笑みを抑えられずにいた。そんな表情をしたまま顔を上げようとして……、

「…………」

田が呟つた。

買い物帰りだらうか。幼馴染みの南条澄香が、買い物袋を取り落としていた。今田の夕食はカレーなのか、ジャガイモやタマネギやニンジンが地面をこりこりと転がっている。

……ああ。どうでもこの辺りに少し見覚えがあるはずだ。確かこのマンションに一人暮らししてゐるんだよなこいつ。高校生になつたと同時に実家から引っ越し、その手伝いをもさせられた記憶があるのを今頃思い出す。

「……パパ？」

「のびみょーな雰囲気に幼いながらの感性で気付いたのか、少女は俺から離れると、澄香と俺、交互に見る。

「……パパ？」

少女ではなく、澄香が口にする。俺は冷や汗とも脂汗ともつかない汗を頬に感じた。

澄香はなにやらショックを受けたような顔をして俺を見つめていた。当然だろ？ 10歳にして娘がいる男を見たのだから驚くのも無理はない。セミロングの黒髪が動搖に揺れ、均等のとれた顔立ちはいつもより若干引きつるようになんでいて、少し青ざめていた。  
……え？ まさか『ロリコン発見』だとか思ってないだろ？ お前？

「…………その子、あなたの……娘、…………なの？」

びっくりしたあの言葉を聞かれていたようだ。澄香の確認するような口調に胸が痛くなつてくる。

「え、ええ～と……娘といふかなんといふか……」

しかし俺も面を切つて否定することもできない。否定したらしたでこの子が泣き出しそうにならしないで変な誤解を生んでしまひ。

俺にどうしようと？

今すぐ家に帰つて寝たいといつ欲望に駆られていると、俺と澄香が見つめあって固まつたこの状態になにか勘違いしたのか、少女がおもむろに口を開いた。

「……マジか。

澄香を指差して言葉。」「ひひひ人に指を差したら……って！」

「「咲、ママッ！」「

俺と澄香が同時に言葉を発する。先に叫びあくが、俺達はなんにもやましいことなんてしてないからなー。ほ、ほらー。この子も最後ハテナつけてたし！ 疑問系だつたら！？

俺の内心の激動する動搖をよそに、澄香は淡々とした口調で、だが顔は真っ赤にして、俺に聞いてくる。

「その子、私達の子？」

「わけないだろ！」

そうおきたいがこの子が泣くかも知れないので怖くてできない。

「産んだ覚えはないんだけど……」

そうに決まつてゐだろ！

つか俺達、産むようなことなんてしてないし……あ、自分で考えてなに顔を紅くしてんだ俺！

「よし、信じるわー！」

「って信じるのかよーー？」

だから明らかに戸籍が違うだろ！ 僕達は純粋な日本人！ この子は外人！

「じょ、〔冗談よ……」

「じょ、〔冗談つて……」

俺と澄香は氣まずやつて視線を反らしあつ。そんな微妙な年頃にいるのだ。

「…………？」

そんな俺達を、少女は首を傾げて不思議そうに見つめていた。

……………

俺がヤクザのような人達に追われていること、少女にバレないようにそれとなく娘ではないことを説明すると、澄香が部屋に上がりなさいと言つてくれたので、俺はいま澄香の部屋にお邪魔しているところだ。

ぬいぐるみが沢山あることに少し面食らいつつも可愛らしいとも思つ。学校では偉そうな（実際偉いんだが）こいつもやはり女の子だと再確認する。

「……そういえばキミ、名前は？」

澄香が作ってくれたカレーを食べながら、少し遅れたが少女に名前を聞く。少女は甘口カレーの美味しさに感激して食べていたのを中断して、俺に教えてくれた。

「クルル・ツェンゼ」

クルルか……。可愛らしい名前だな。そうして俺も自己紹介しようとすると、

「パパは久津川時風くつがわトキカゼ」

とクルルの口から紹介され唖然となる。

「な、なんで俺の名前を知ってるんだ！？」

驚いて詰め寄ると『だつてパパだもん』としか言わず要領を得ない。まさか本当に俺の子供？ と自分に疑惑を持つ。

「歳はいくつ？」

「七歳！」

澄香の質問に元気よく答えるクルルを見て自分への疑惑が晴れた。だつてそうだろう？ クルルがいま七歳なら、クルルがこの世に生まれたのは俺が九歳のときになるのだから。

内心胸を撫で下ろすと、再びクルルに質問できる心境にまで回復した。そうだよ俺。俺が自分を信じじないでどうするんだ。

「へえ～、七歳かあ。どこの住んでるの？」

「××市××町88 2」

「へえ～そこには住んでるんだあ～…ってそこ俺の家の住所じゃん！」  
？」

納得しそうになつてツツツツをする。なんで知ってるんだひつこ  
の子は。

真剣に悩み始める俺に見かねたのか、クルルは懐に手を入れると、  
そこから手紙のようなものを取り出した。

「読んで」

俺はそれを受け取り、封を切った。

そこにはこう書かれていた。

「我が親愛なる息子へ

この手紙をお前が読んでいるところとは、私はすでに……海外  
で豪遊生活をしていることだらつ！

お前の側にクルルちゃんがいると思うが、彼女は私の親友の娘で  
ね。可愛いだらつ？　だが襲うなよ。襲うなら十六歳になつてから  
だ。それまで調教するなり自分好みに開発するなりして我慢しなさ  
い。

おお～っとー。お前はいまこの時点で、『この手紙を今すぐ破り捨てて燃やしたい』と思つていいだろ？が最後まで読んでくれ。ここからが本題だ。

実はその子は超絶お金持ちの娘さんでね、それが原因で世界各国の要人から狙われてこるのでよ。そのため何度も誘拐されかけたことがある。

私の親友はそれに心を痛めていて、なんとかしてくれる人物を探しているんだが、世界中から狙われるなんて誰もが嫌だろ？

そこで、お前の出番なわけだ！

ストップ！ お前のことだから『ふ・ぜ・け・る・なあ！』  
と手紙を破ろうとしているところだと思つがもう遅いぞ？ なにせ私はすでに親友から金をまつたくじ……もとこ、交渉成立金を頂いてこるからね。

俺はその金でちゅうくら『世界豪遊の旅』といつのをしてくるから、全て任せたぞー！

それから、その子にはお前のことを第一のパパだと洗脳してあるから、ちよつとせんつとじや解けないからな。俺つてやるう！

えじやあ、バイバー

……ああ、あと、ちなみにだが、その子は知り合いでヤクザの親

分さんに預けていたんだが、その愛くるしい容姿のおかげで、その組の方々達のアイドル的存在になってしまったんだよ。

クルルちゃん、その過保護すぎが嫌になつて何度も逃げ出したりしているので、組の方々達は誘拐されないか心配でピリピリしているからキラッケテネ？

一応、お前が第二のパパだということお前の家に住むことは周知してると思うけど、カツとなられて殺されないよう気にキラッケテネ？

大丈夫だ！ お前ならこの困難を……………あ、無理だわ】

「最後なんだよー！」

いろいろと憤慨するとこ満載だつたが、一番最後がかなりムカついた。あのクソ親父、また厄介事を俺に押し付けてトンズラしやがつた。というか、なに洗脳してんだアイツ！

「ね、ねえ……だ、大丈夫なの？」

澄香が心配そうに聞いてくる。一緒に手紙を読んでいたので世界各国から狙われていることを知ったからだ。

「そんなん知るか！」

俺は激情に任せてそう吐き捨てる。

「え……？」

するとクルルちゃんの目から大粒の涙がぽろりと溢れ落ちそうになリ……、

「はいウソウソウソだよークルルちゃん！ 泣かないでイイコイイコだからー！」

抱き締めて頭や背中を撫でてあやす俺。

そのとき、俺の携帯が鳴った。ただ番号だけが表示されている。誰からだろう。俺は携帯を耳に押し当てる。

「はい、もしもし？」

『クルルちゃんを泣かしたら殺す』

ブツツツツツツ。

「…………」

俺が泣きそうだよ。

「時風もいろいろ大変ね…………」

澄香が人事のように…………実際に人事だが…………そう言つて俺の手を引いて立ち上がらせられる。

「え、なに？」

「あなたを追い掛けたヤクザって味方なんでしょう？だから、帰りな」

「なんで？」

「面倒に巻き込むな

薄情者……

そう叫びたかったが俺の口からは違う言葉が。

「わかったサヨナラ」

俺はクルルちゃんと連れだって外に出た。澄香はバイバイと手を振るクルルちゃんに手を振り返し、俺にはじて愁傷さまと哀れむような目を向けると、ドアを閉めた。……あ、しかも鍵も閉めやがった。

「パパ……」

がつくつと落ち込む俺を見上げるクルル。俺は苦笑しながら聞いた。

「なに？」

「手……繋い？」

手を差し出され、俺は真上を見た。……察してくれ。悶絶しているのだよ。

「あ、ああ……こ……」

俺は柔らかくて、小さなその手をそっと握り、歩き出した。クルルの歩幅に合わせるように歩くつと。

外はすっかり真っ暗で、夜空に飛び立る満月が夜道を明るく照らしている。

「綺麗だね～」

「ああ、もうだね……」

夜空に輝く星のよひに瞳をキラキラさせるクルル。「これからこの子と暮らしていくんだよな……」。

家には母親は早くに亡くしていないし、クソ親父はどっかに豪遊しに行っていないし。これからはこの子と一緒に家の内で過ごすのか……。

「パパ……」

俺が不安半分心配半分で歩いていると、クルルが俺から手を離して真正面に立った。

「ちょっと遅れましたけど……」

クルルは両手でドレスのスカートの端を摘むと、気品を漂わせる優雅な動作でお辞儀した。

「これから先…… よろしくお願ひします」

……それは、満月の月明かりに照らされ少女が蒼く輝き、まるで妖精のようだと錯覚さえした幻想的な夜の出来事。

「………… ああ」

それにじしまりと見惚れていた俺は、よつやかく絞り出すよつて言葉を発する。

「………… いぢりや、よひじくな」

その瞬間、俺達“家族”の生活が始まった。

## (後書き)

続きそつで続くことはないと思われる物語。いかがでしたでしょうか？

読者で、この続きを読みたいと思われてる方も、これでいいよと思われてる方も感想下さい。

作者で、書かないなら代筆させると思われてる方も、これで終わつてよいだらうと思われる方も感想下さい。

それが私の次作品への原動力となります。

稚拙で見苦しいところはあつたかも知れませんが、もしも楽しんでもらえたなら幸いです。

ではでは……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2463d/>

---

パパと呼ばれて

2010年11月19日16時26分発行